

地域づくりと関連付けた 「探究的な学習」現地プログラムの開発

株式会社ノースプロダクション会長

一般社団法人十勝うらほろ楽舎/うらほろスタイル
NPO法人食の絆を育む会/一般社団法人SackOmi 創設者

近江 正隆

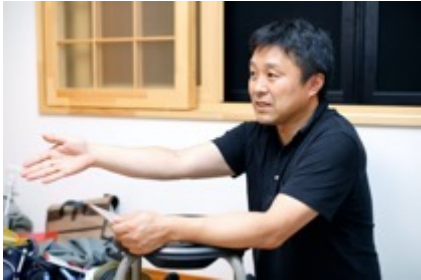
本日、お話ししたいこと

- 1 はじめに～自己紹介
- 2 農村の価値
～農村が持続するためのアプローチ
- 3 新たに開発したプログラム
- 4 終わりに

自己紹介（近江正隆）

近江 正隆（おうみ まさたか）

- 1970年 東京目黒生まれ、油面小学校、目黒第四中学校卒業
- 1990年 都立戸山高校卒業後、北海道放浪生活を経て浦幌町に移住
- 1991年 漁業に従事し、17年間の漁師生活スタート
- 2003年 楽天魚部門年間売上ランキング1位（水産加工・ネット産直展開）
- 2006年 子どもを軸としたまちづくりスタート（うらほろスタイルを提唱）
- 2008年 企画会社ノースプロダクションを設立（若手農林漁業者の支援）
- 2012年 NPO法人食の絆を育む会設立（十勝550戸の農林漁業者と体験活動展開）
- 2020年 一般社団法人十勝うらほろ楽舎設立（持続可能な社会づくりに着手）
- 2025年 一般社団法人Sackomi設立予定（2025.2）



- ＜これまでの主な役職＞
- ・内閣府地域活性伝道師
 - ・首相官邸再チャレンジ懇談会委員
 - ・文部科学省食育有識者会議委員
 - ・北海道社会教育委員
 - ・北海道教育大学釧路校非常勤講師



2010年講談社から著書「だから僕は船をおりた」を出版。東京生まれの若者が数々の困難を乗り越えて、葛藤しながら前に進む半生を赤裸々に表現。2010年前後は、テレビやラジオ等にも数多く出演した。また著書は小山薫堂氏から推進いただき「この人の人生こそあなたのお手本！」と絶賛いただく。小山薫堂氏の著書「社会を動かす企画術」で紹介を受ける。久石譲、有森裕子、白石康次郎等20名のゲスト中の一人として小山薫堂氏とのセッションで語った想いが詰まっている内容。



田中邦衛さんに著書出版の報告(2011)「北の国から」からは、近江正隆の原点。

「うらほろスタイル」「十勝うらほろ楽舎」関連以外の活動の変遷：1999～2019年



水産加工場を手作りで建設。漁師の本ししゃもは人気商品に。ロゴ：武田双雲氏作



若手農林漁業者をプロデュース。「十勝おやじの背中を越える会」は国の白書にも記載。グルメ雑誌の表紙を監修（バフンウニをプロデュース。子ども向け人形劇を脚本。



十勝管内約550戸の農林漁業者たちと、都会の高校生を対象とした農村ホームステイ事業を展開。10年間で約22,000人の高校生が大自然の中で「いのち」「他人の温かさ」に触れた。TBS全国放送のドキュメント番組（3作）を近江がコーディネートし、北海道放送が制作。

近江が北海道で20年間かけて創ってきたこと+これからのイメージ 活動のテーマ：「農山漁村」を持続させる

農山漁村の価値 ①衣食住を支える ②繋がり（ひと/自然）の大切さを学ぶ（多様性/包摂性/持続可能性）

＜農山漁村の持続に必要なこと＞

①次世代人材の育成による継承

②自立・自律した地域経営

③存在意義（価値）への理解

第1フェーズ

2005～2024年

浦幌・十勝

次世代人材の主体的な
定住意識の醸成

うらほろスタイルの創設

- 自治体負担ゼロ予算での船出
- 子どもの変容→町の主体性の萌芽
- 教員養成課程・CS展開との連携
- 町民の進化と持続的な事業創出
- 子どもの思い実現ワークショップ

地方創生人材の確保・事業創出

十勝うらほろ楽舎の創設

- 副業・出向・転職での人材の確保
- 自治体負担ゼロ予算で新規事業創出
- 企業連携事業（ロート・東武等）
- アカデメイア（企業人研修）
- アグリダイブ（大学生研修）
- リジェネラティブ農業の模索

都市次世代人材が農山漁村を身近な存在。価値を感じる仕組み

食の絆を育む会の創設

- 十勝19市町村550戸の取組み
- 農村ホームステイ＝家族のふれあい
- 受入家庭の進化・変容
- 都市では感じられない気づきの宝庫
- インターン・進学・定住者の増加

定住意識の向上
担い手としての成長

他地域・他国への展開

SackOmiの創設

- 研究機関（北大等）との連携
- JICA・国連・企業との連携
- 1億人の子ども絵プロジェクト

地方創生の促進

食料安全保障“十勝モデル”の模索
他の農山漁村地域への展開

とかちラボ（仮）の創設

- リカレント教育農山漁村モデル
- 自治体職員リーダーシップ研修
- 十勝の自治体→全道→全国へ展開

コロナ禍での価値観の変容

探究学習プログラムへの進化
若手農業者の成長の機会に活用

農水省農泊事業の活用

- スタディツアーの造成（私学連携）
- インバウンドツアー造成
- 農村ホームステイの進化深化・拡充

第2フェーズ

2025～2030年

北海道・全国

コロナ前までの教育旅行プログラム

ホームステイ民泊での1泊2日の体験がメイン
十勝の農林漁業者と受入組織「NPO法人食の絆を育む会」を結成し、自治体と連携実施

(1) 第29865号 2019年(平成31年)2月5日(火曜日)

農山漁村ホームステイ10年
修学旅行生2万人が来勝
交流密に

【五】国道36号(黄金郷)沿いの「フンペ」の滝で、結氷が進んでいる。連日、厳しい寒さが続き、つららのような氷柱が幾重にも岩壁を覆い、自然の造形美を生み出している。

【三】面に関連記事

（伊藤亮太）

NPO法人食の絆を育む会（浦幌町、近江正隆理事長）が取り組む農山漁村ホームステイ事業が、開始から10年の節目を迎えた。都（消費）の高校生が生産現場を体験し、人とのつながりを感じる新しい教育の場として定着した。受け入れ延べ人数は2万人を超え、ホームステイ参加者が進学、就職先に十勝を選ぶケースもみられる。

農山漁村ホームステイは修学旅行で訪れる大阪や東京の高校生を農業者、漁業者、林業者で受け入れ、生産者の日常を体験してもらう事業。

2008年に浦幌町で試験的に実施し、10年から管内の農家と連携して本格的に始めた。現在は取り組

ホームステイを終えて生産者との別れを惜しむ参加生徒（2018年、南十勝エリア、食の絆を育む会提供）

「たのしみ」と教えられて育つため、他人への安心感を育きた。など、の感謝が寄せられている。学校の申し込みは多く、新規の申し込みは多数あり、受けきれない状況だ。最近では、ホームステイ事業に参加した生徒が十勝で進学、就職・就農する例も毎年、十勝に訪れる来客も、農作物の収穫の手伝いに来る参加者も少なくない。受け入れる側も、1次産業の魅力や価値を再認識する契機になっている。

近江理事長は「最初は農業への理解を深めようと思ったが、想定しなかった効果も参加者や生産者双方に生まれている。事業の課題はあっても、持続的に実施しているのは格別な取り組みだ」と話している。



ノースプロダクションで立ち上げ「NPO法人食の絆を育む会」に引き継いだ「農村ホームステイ」。コロナ前の10年間で、約23,000人の高校生を修学旅行で受け入れた実績。「命の糧食が生まれる現場を見てほしい」とピークは約500戸の農林漁業者で受け入れ。都会の高校生に家族のようなふれあいを通じて「信じれる他人の存在」を実感してもらうことを目的に事業を展開。

新たな課題と対策（コロナ以降の再スタート時）

【課題】

- ① コロナ前までは可能だった大人数(生徒200～300名規模)の受け入れが困難に。
 - ・ 受け入れていた農林漁業者の価値観の変容、経営形態の変化
- ② 学校の修学旅行や教育旅行に対する考え方が変化し、探究的要素がより求められるように



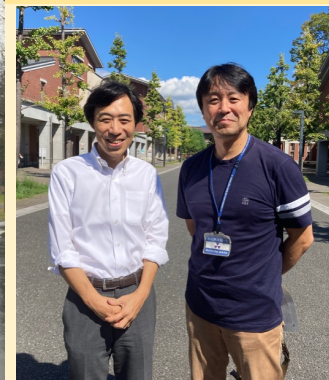
【対策】

探究的要素を含むプログラムの開発（スタディーツアーの開発）

- ① 40名規模（バス一台）の受け入れを想定（希望者を対象）。食の絆を育む会の再スタート
- ② 食・いのち・地域・ひとと出会うツアーを創出。体験＋振り返りワークショップの構成
- ③ 食の絆を育む会＋他の団体・他地域のサポートを積極的に行い、モデル事例を複数生み出す

プログラム開発の流れ（食の絆を育む会）

2024年度 プログラム開発準備～教員とのネットワークづくり



十勝地域で北海道教育大学教員など教育関係者約15名に現地体験会を実施。
また同志社中・立命館中・新渡戸文化高・関東学院高などの教員が個別に現
地を来訪。関東学院高・新渡戸文化高では2024年から試験実施。

首都圏の学校関係者に
対し説明会を実施

2025年度 プログラム開発実施～モデルプログラムの実施



複数の学校で個別にプログ
ラムを開発しモデル実施が
行われた。プラスで他地域
での展開も試験実施



参加した淑徳
高校の教員が
十勝を来訪

開発したプログラムの例 ① 食の絆を育む会モデル「生きるを感じ、命を考えるスタディツアー」

日次	月日・曜日	行 程	宿泊・備考
①	8/23 (土)	11:05頃 羽田空港 → 12:45頃 帯広空港 (JAL575便想定) 【機内持参弁当昼食】 13:00 15:15 ファームステイプログラム …………… ファームステイ開始 【農家との対面・農作業手伝い開始】 13:15～入村式 13:45頃～それぞれの家庭へ	ホームステイ
②	8/24 (日)	14:00 【AM】ファームステイプログラム 【各農家にて昼食】 15:30 【PM】宿泊ホテルにてファームステイ振り返り・ワークショップ 17:30頃終了予定 14:30～退村式 15:00頃～ホテルチェックイン	ホテル
③	8/25 (月)	8:00 ホテル → 10:00 明治なるほどファクトリー十勝 【見学】 11:30 13:00 「生きる」を考えるワークショップ 【車内弁当昼食】 【酪農牧場にて仕事体験＋見学】 15:00 16:30 ホテル 道中、展望台や農場の見学・講話 ホテル到着後17時頃～いのちと生きるを考えるワークショップ	
④	8/26 (火)	8:30 ホテル → 9:00 帯広畜産大学 【現地学生との交流】 13:00 14:00 帯広空港 → 15:15頃 羽田空港 (JAL574便想定) 17:00頃	

昼食はお弁当または大学生協学食
※学食の場合は各自支払い



畑作ホームステイ

農村ホームステイ

- ・ 農家さんと家族のようなつながりをつくる
- ・ 作業体験（収穫体験、草取り、袋詰め・出荷作業など）



酪農体験

酪農体験

- ・ 作業体験（搾乳、哺乳、給餌、子牛の散歩）
- ・ 酪農家さんからのお話
 - ・ 牛乳ができるまで
 - ・ 牧場の仕事（酪農家さんの一日）
 - ・ 牛のからだ



振り返り/WS

振り返り/ワークショップ

- ・ 振り返り
 - ・ ホームステイ
(体験内容、印象的な出来事・言葉、農家さんと話したこと、農家さんの仕事内容)
 - ・ 酪農体験（体験内容、印象的な出来事・言葉）
 - ・ 2日間通して「いのち」「いきる」について考えたこと
- ・ 帯広畜産大学訪問
 - ・ 構内散策
 - ・ 帯広畜産大学で学ぶ大学院生と対話

開発したプログラムの例 ② 十勝うらほろ楽舎モデル「うらほろ未来づくり探究学習」

地域づくりに関わる「人生の先輩」たちのフィールドで体験や対話を行います。
普段どんな仕事をしているのか、自身の仕事を通じてどんなまちをつかっていきたいかなどの想いに触れていただきます。
プログラムを通じて、自分らしい生き方を考え、未来を創造する力を育みます。

まちづくり×映像テクノロジー



テクノロジーの力でまちづくりに関わり続けるひとたちとの交流を通じて、自分たちのまちの魅力発信方法や自分たちの未来のまちづくりをテクノロジーの力でさらに発展させる施策を考えます。

まちづくり×産業



浦幌町の子どものアイデアから始まった化粧品事業の例をもとに、自分たちの町の魅力をどのように発信していくか、どんな地域活性化案を実施していくのかを考えます。

まちづくり×スポーツ



スポーツを通じて多様な人が協働し、学びながら豊かな「ひとづくり」「まちづくり」を目指していくために今自分たちに何ができるのか。どんな施策を実施していくかを実際に身体を動かしながら考えます。

まちづくり×国際交流



2023年にアフリカ・マリ共和国と浦幌町の国際交流が始まりました。浦幌町の事例を踏まえて、今後自分たちのまちが国際的な発展をしていくための地域活性化案を一緒に考えます。

まちづくり×子育て



日本一20代女性議員が多い浦幌町で町議会議員と子育ての両立をされている方と一緒に、少子高齢化が進む現代でどんな未来を描いていくのかを考えます。

まちづくり×若者起業



町内出身者・町外出身者問わず、様々な分野で活躍する若者の想いに触れ、自分の今後のキャリアや自分たちが住んでいるまちの未来を彼らと一緒に考えます。

想いをつないで未来を創る”地域づくり”を体感 ～浦幌活性化プロジェクト！～

番号	テーマ	テーマ概要 聞けること・キーワード
1	広報	浦幌町の活動を全国に広げるために、東京の企業人と浦幌町民が、立ち上げたインターネットラジオ(番組名：うらほろラヂオ) の作り方と運営方法
2	政治	議会議員の働き方・役割、まちづくりのしくみ
3	起業	田舎で起業し人の流れをつくり、あらたな仕事を生み出すチャレンジ
4	伝統継承(炭窯)	再生可能エネルギーとして小さなエネルギー生産として改めて注目されている木炭。炭窯を次世代につなぐ覚悟と生産現場を知る
5	行政（公務員）	浦幌町という地方公共団体の紹介と、浦幌町における地域課題について伝える中で、身近に感じてもらう。
6	地方産業(化粧品事業)	まちの子どもたちの提案を形にし、コスメを通じて浦幌町の魅力を全国に広めていく。
7	生涯学習	うらほろに集まる若者たちの思い、多世代の力が生きるまちづくりとはなにか 幅広い世代が学べる今の浦幌の生涯学習とは うらほろ独自の学びが、その後の社会でどう生きているのか 事業(イベント)の企画
8	国際交流	アフリカ・マリ共和国（および他の地域も含む）との国際交流を通じた、浦幌町の新たな地域活性化プロジェクト
9	地方流通・医療支援	少子高齢化・過疎化が進む浦幌町。買い物や医療課題のある地域でどのように課題を解決していくのかを考える
10	若者魅力発信	創業から90年以上経つ町で唯一の蕎麦屋が閉業の危機に 21歳の若さで蕎麦屋を継いだ例をもとに、町の魅力やお店の魅力を宣伝する

開発したプログラムの例 ③ 食の絆を育む会+十勝うらほろ樂舎のW探究学習 ～関東学院高校

①+②を同日実施。（東武トップツアーズからの2人の出向者が中心に準備+当日運営）

日次	月日・曜日	行 程	宿泊
1	11/11 (火)	10:45 羽田空港 □□□ 帯広空港 □ 帯広畜産大学 □ 昆布刈石展望台 □ 複合施設FUTABA □ 留真温泉 □ 夕食 JAL575便 (オリエンテーション) (記念撮影) (うらほろってこんなところ) (かし和家) 持参弁当(機内で昼食) ※浦幌高校(車窓見学)を経由してFUTABAへ	【浦幌町】 複合施設 FUTABA
2	11/12 (水)	8:30 宿舎 … 浦幌町役場…町内散策・昼食 □ アサヒ・アグリ・アクション □ 複合施設FUTABA □ 留真温泉 □ 夕食 (役場職員との対話) (地域の大人との対話) (浦幌の中学生との交流)	【浦幌町】 同上施設 連泊
3	11/13 (木)	8:30/10:00 複合施設FUTABA □□ うらほろ道の駅 □□ 帯広畜産大学 ……昼食 □□ 帯広空港 □□□□ 羽田空港 (3日間通じての振り返り) (お土産購入) (2コース合同総括) JAL574便	

日次	月日・曜日	行 程	宿泊
1	11/11 (火)	10:45発 羽田空港 □□□□□ 帯広空港 □□ 帯広畜産大学 □□ ホームステイ入村式 ホームステイ JAL575便 (持参弁当(機内で昼食)) ・近江さん講話 ・入村式	【十勝広域】 食の絆を育む会 民泊 (帯広市～新得町周辺)
2	11/12 (水)	終日 ホームステイ (夜は各自、振り返りツアーを活用し、気づきを整理)	同上
3	11/13 (木)	10:30/12:30 □□ 帯広畜産大学 …… 昼食 □□ 帯広空港 □□□□ 羽田空港 退村式 振り返りワーク (お弁当) JAL574便 ・2コース合同で総括 ・近江さん講話	

開発したプログラムの一例 ④ 他地域展開モデル～オホーツク美幌町地域連携実施

学校法人 新渡戸文化学園 フードデザインコース 御中

旅行日 2025年11月9日（日）～ 11月12日（水）

旅行先 北海道（美幌） 方面 人員 生徒 18名 教職員 2名 合計20名

日次	月日・曜日	行程	宿泊・備考
1	11/9 （日）	羽田空港第2ターミナル10：00集合 11:15 羽田空港 → 〈ADO077便〉 → 13:00 女満別空港 13:40 大型バス 14:00 美幌町歓迎挨拶・入村式……各家庭へ 昼食は各自自由	[美幌] 食の絆を育む会 農泊
2	11/10 （月）	各民家にてホームステイ 昼食は各民家にて 13:00 13:30 14:30 15:00 ……退村式……ふりかえり……日本甜菜製糖工場……夕食含めて自由行動…… 18:30 グリーンビレッジ	[美幌] グリーンビレッジ美幌
3	11/11 （火）	オホーツクテロワールの方との体験学習、北海道立北方民族博物館、美幌博物館(月曜定休) 3日目に関してですが、旅程の詳細は現在検討中です。	[美幌] グリーンビレッジ美幌
4	11/12 （水）	美幌町 ⇄ 美幌高等学校との交流 ⇄ 13:20 美幌町(昼食) ⇄ 13:40 14:40 女満別空港 → 〈JAL564便〉 → 16:40 羽田空港	

航空機 → 徒歩 バス == JR == 船 ~~~~~ ロープウェイ（ケーブル含む）~~~~ 私鉄（モノレール含む）+++++

開発したプログラムの一例 ④ 他地域展開モデル～オホーツク美幌町実施



ホームステイの最初と最後に町長・副町長の挨拶。地域の基幹産業を支える企業の協力で学びが充実。砂糖の原料（ビート）生産者との触れ合い→工場見学



工場では産業の可能性＋課題を聴く

美幌町の職員の熱意



町一体となった受入体制
独自プログラムの構築



関係者ミーティングで伝達



当日実施



趣旨に賛同した受け入れ家庭でのホームステイ。信じられる他人との出会いがオホーツクでも。



ホームステイ中教員は地域を巡回。様々な対話で地域を体感。



地元の料理研究家のサポートで調理を実施。ツアーの終盤で食材を作った料理づくり体験

地域づくりに最適！ 探究型スタディツアーのすすめ

コロナ以降の様々なチャレンジを通じて「ホームステイ→探究学習」の可能性をあらためて感じている。とくにホースステイで地域と家族のようなつながりができ、地域でリアルに学びを深める「スタディツアー」を体験するとその後の関係人口にも直結し、地域づくりににも有効的であると確信している。これからも十勝地域での実施及び道内への普及を行っていききたい。また道内に限らず、地域で新たに「民泊探究型スタディツアー」の開発・実施を検討している熱い思いを持つ方のサポートもニーズがあれば行っていきたい。

近江正隆 north.oumi@gmail.com

終わりに

コロナで、ソーシャルディスタンスが推奨され、いまだに「脱・密」「ふれあいの減少」「孤を前提」が社会全体に残っているのが現状。未来を担う次世代人材に、他人と触れ合うことの大切さを伝える必要があるとあらためて考える。社会は他人の集合体。信じられる他人が社会にいることを子どもたちが発達段階で感じることは極めて重要。特に、コロナ後は。ホームステイ（民泊）は、どこの地域も受け入れが困難になりつつある。でも赤の他人の家で、寝食を共にする「ホームステイ（民泊）が子どもたちを与える影響はこれからもっと重要になってくるはず。これまでの受入の枠組みにこだわらない新たな仕組みをつくることはできないかと考えています。（例えば、全国の農山漁村に暮らす移住者や子育て世代などで全国規模でホームステイを展開できないかなど。）あらためて皆さんと考えたいです。社会が持続するためには、農山漁村の存続が不可欠です。農山漁村にある価値について、そしてこれからの農山漁村が担うべき更なる役割について。

本日は、ご清聴、ありがとうございました。

近江 正隆